

令和元年6月7日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02379

研究課題名(和文) 中世における漢故事のパラフレーズ

研究課題名(英文) Study of how medieval literature in Japan accepted, reconstructed and reproduced Chinese classic anecdotes

研究代表者

森田 貴之 (MORITA, takayuki)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：90611591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本中世の古典文学がどのように中国文学を受容し、再構築・再生産していったのかについて、特定の原典ではなく、その原典を離れて広がっていく「故事」という単位に注目して考察を行った。日本で広く受容された漢故事を取り上げながら、韻文、散文、芸能等の諸ジャンルを越えて広がりつつ、また個別の作品で変化していく様を示した。同時に、古代、近世を視野に入れた通時的な検討を行った。その結果、かならずしも特定のテキストに依拠せずとも、共通基盤となって広がっていった漢故事受容実態を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の和漢比較文学研究の枠組みにおいては、漢籍や漢詩句のテキスト受容に研究が集中しているが、漢故事原典の形態から和歌へと、大きくパラフレーズ(変奏)された文学作品においては、テキスト間の比較による原典の探求だけでは、必ずしも有効な分析方法とはならないこともある。原典の探究の上に、個々の漢故事利用の方法を検討することにより、テキストを超えて、各文芸の基層にある「共有知」としての漢故事の世界を捉えていかなければならないことを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we studied how medieval literature in Japan accepted, reconstructed and reproduced Chinese classic literature; through focusing on the unit of anecdotes rather than specific works. We showed that such anecdotes changed in individual works, while they spread beyond the genre such as poetry, prose or performing arts; considering not only medieval literature but also ancient or early-modern literature. As a result, we found that medieval literature in Japan accepted Chinese classic anecdotes as a common foundation, not always depending on some specific texts.

研究分野：日本古典文学

キーワード：和漢比較文学 漢故事 中国文学 翻訳 翻案

1. 研究開始当初の背景

従来の和漢比較文学研究の枠組みにおいては、漢籍や漢詩句のテキスト受容に研究が集中しているが、漢故事原典の形態から和歌へと、大きくパラフレーズ(変奏)された文学作品においては、テキスト間の比較による原典の探求だけでは、必ずしも有効な分析方法とはならないこともある。原典の探究の上に、個々の漢故事利用の方法を検討することにより、中世日本文学における漢故事利用の具体的様相を明らかにすることが求められている。すなわち、テキストを超えて、各文芸の基層にある「共有知」としての漢故事の世界を捉えていかなければならない。これまでの研究史においてもその事例は個別的には論じられてきた。しかし、これらの背景には共通する漢故事の流布・受容基盤を想定し、その共通基盤が、それぞれの諸領域でどのように変奏せしめられたのか、という視点は乏しかった。これが研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

日本中世の古典文学が中国故事をいかなる文学的環境によって受容し、いかなる特徴をもった作品として再構築・再生産していったのかを究明することを目的とした。具体的には、漢故事題詠歌、漢詩句撰取歌、聯句や連歌に見られる漢故事を背景とする句、歌句と漢故事との関係に言及する歌学書、漢籍翻訳文学作品、漢故事説話を含む軍記物語、漢籍注釈書である抄物など、関連する諸領域を広く視野に入れ、単なるテキスト間の影響・受容関係に現れない、中世人の共通基盤としての漢故事受容実態を浮かび上げ、中世文学に新たな研究基盤を構築することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)翻訳・説話文学領域、(2)和歌・物語文学領域、(3)聯句・連歌文学領域、(4)抄物・訓点資料領域の4つの領域を設定し、研究を進めた。上記の4領域には、それぞれ責任者を設け、かつ複数のメンバーで相互に意見を交換しつつ研究を推進した。(1)翻訳・説話文学領域では、中国文学を和文化的な作品および中国故事を素材とする説話を対象とし、原典から諸注釈を経て説話化されていく様相を探った。(2)和歌文学領域では、漢故事題詠歌もしくは漢詩取り和歌の精読から、それぞれの和歌表現および典拠との比較を通じて、パラフレーズの具体相を検討した。(3)聯句・連歌領域では、漢詩文や和歌の故事をまとめた連歌詠作のための参考書の調査から、共通基盤としての漢故事受容形態の解明を進めた。(4)抄物・訓点資料領域では、従来、主に国語資料として用いられてきた、漢籍講釈の口述筆記テキストである抄物を対象に、その漢故事受容の様相を追った。

4. 研究成果

(1)翻訳・説話文学領域

森田は、延慶本『平家物語』に見られる特異な李陵蘇武譚を取り上げた。李陵蘇武譚は諸書に引用され、多くの「蘇武持節」「李陵初詩」など多くの故事を故事の出典となったものであるが、日本では『史記』や『漢書』などの史書の形態から離れ、様々に変化した形が、朗詠注や古今注などに広がっていることが指摘され、延慶本の李陵蘇武譚にも流れ込んでいることが指摘されていた。その延慶本の出典を再度整理し、『蒙求和歌』に朗詠注、古今注の情報を交え、辛苦、恩愛、持節など李陵蘇武譚の諸要素を集成するような内容になっていることから、原典の史書の一連の歴史叙述から、故事として諸書に広がり、それが延慶本で再び統合され新たな歴史叙述となっていることを論じた。

さらに、森田は、孝子故事集『二十四孝』の漢詩を掲出し、孝子説話の内容を詠んだ和歌を併記する『二十四孝詩歌』の基礎的研究を行った。『二十四詩歌』は、現存本の配列は御伽草子『二十四孝』に一致し、漢詩部分の異同も概ね一致するが、そこに付された和歌の一部は御伽草子系統およびそのもとになった『二十四孝詩選』ではなく、故事の出入りがある『日記故事』系統のものに依っていることを示した。『二十四詩歌』の詩と和歌は別々の来歴を持ち、それが結合されている作品であり、それは仮名二十四孝としての御伽草子系の流布と『二十四孝詩選』に代わる原典としての『日記故事』の流布を反映したものであることを論じた。併せて内閣文庫本の翻刻と肥前島原松平文庫本との対校を行った。

鳶は、『蒙求和歌』の恋部の表現について論じた。『蒙求和歌』の説話部分は、原典『蒙求』の注の翻訳とってよい性質のものであるが、作者光行が独自に附加した要素もある。恋部においては、いくつかの説話を通じて、女性の内面の美しさという統一的な要素が加筆されている。これは、日本の文藝として「恋」にふさわしい内容にするためには、女性の美しい容姿を表現するだけでは十分でなく、その女性の精神的な部分を描写する必要があることを示しており、そこにこそ日本的な文藝の特質を認めることができることを論じた。

(2)和歌・物語文学領域

小山が、典拠として唐代伝奇「鶯々伝」との関係が指摘される『伊勢物語』六十九段について論じた。とくに「鶯々伝」がそもそも唐代伝奇「遊仙窟」からの影響を受け、神人婚姻譚を継いだ物語であることに注目した。そして、六十九段の物語が、「鶯々伝」から構想されたものと見るよりも、『遊仙窟』を物語の枠組みとして利用しながら、恋の進行を具体性や現実性を持たせて描き出すために、細部の描写や設定を「鶯々伝」に依ることで表現しようとしたものであることを論じ、「鶯々伝」と六十九段の比較のみではなく、物語の枠組みと『遊仙窟』を通して六十九段の考察する必要性を指摘した。

さらに、小山は、平安時代末期の歌僧・西行の和歌には、伝統的な和歌表現を逸脱することは違い、とりわけ漢文訓読調が指摘できることにも注目した。基本的に訓読調を嫌い、和語を基調とする和歌の中でも、釈教歌が例外的に訓読調を許容して展開したものであったことを顧みると、西行和歌に漢文訓読調が見いだせるのは当然のことものようにも思われる。但し、西行和歌には釈教歌ではない歌においても漢文訓読調が用いられている。朗詠詩句からの訓読語を詠み込んだ歌を調査し、同時代歌人たちとの共時的表現、西行の独自表現、同じ言語体系を持つ経典とのイメージの共有、という3点を考察した。

阿尾は、中世日本で初学者にもよく知られた漢故事「子猷尋戴」を取り上げ、それが中世和歌にどのように受容され変容していったのかを検討した。「子猷尋戴」は、和文学の世界では、平安時代院政期ごろより、伝統的な和歌の文脈で捉えなおされたり、原典の内容が一部切り捨てられてしまったりして、変容を遂げている。中世和歌では、この故事の主題である老荘思想的要素が切り捨てられ、いにしへの風流文雅な文人の交友の話として享受されるに至った。このような享受の仕方背景には、中世歌人たちが、この故事を「漢」故事として意識したのではなく、あくまでも「王朝古典」の延長上にあるものとして捉えていたことがあったと考えられる。中世和歌の世界では、漢故事が歌人たちの共通知識として浸透し、古典化していくことを指摘した。

また、阿尾は、鎌倉時代の京極派歌人である伏見院の和歌のうち、漢詩のテーマの一つである「悲秋」を題材としている「われもかなし草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる比」(玉葉和歌集四六三・秋上)を取り上げて、議論が続いている、この和歌が果たして秋の到来を物悲しいものと捉えた「悲秋」のみを主題としていると読むべきなのか、または、同じく初秋の題材である七夕の牽牛・織女のお話までも念頭において、男女の別れも含めて読むべき和歌なのか、について再検討を加えた。特に、七夕の牽牛・織女のお話は、平安・鎌倉時代の和文学においては、白居易の『長恨歌』の一節と重ね合わせて摂取されるものであったこと、『長恨歌』の詩句が人口に膾炙していたこと、などから、伏見院の該歌にも牽牛・織女ひいては玄宗・楊貴妃のお話が揺曳されて詠まれていると解釈すべきことを指摘した。さらに、中世和歌における漢故事摂取は、言葉のレベルだけでなく、より深い表現世界のレベルにまで及んでいると考えるべきであることを論じた。

(3)聯句・連歌文学領域

竹島が、カリフォルニア大学バークレー校蔵『故事本語本説連歌聞書』の成立に関する、基礎的な研究を行った。該書は、漢詩文や和歌の故事をまとめた連歌詠作のための参考書である。先行研究では、該書が室町期の関東で成立したことを推測したが、その後それ以上の研究はなく、数少ない室町期の故事集であるにもかかわらず、連歌読解に利用しにくい状況であった。そこで、『故事』に収められる全ての和歌、連歌、故事・説話の出典を調査し、『故事』の成立環境をより詳しく限定しようとして、該書に「大原野千句」(1571年成立)が「当世」の作として引用されることを見出した。また、該書に見える、(横手)繁世、尚能(新田尚純)、芳能(芳純)は、宗長や宗牧と関わりのあった連歌好士で、上野国新田(群馬県太田市)を領する新田岩松氏に関係する人々であると同定できた。この二つの発見より、該書は、1571年以降1590年あたりまでに、上野国新田の近辺で編纂された故事聞書集であると結論付けられた。これにより、『故事』に見られる、もとの典拠から離れた(変形した)故事も、地方連歌壇における講義の実態を反映したものであることが示された。

さらに、竹島は、『故事本語本説連歌聞書』の中に収められる心敬に関する句、説話を精査し、16世紀後半の関東連歌壇における心敬の受容を例として、故事受容のあり方を考察した。『故事』は、ある故事を解説した後、その故事を典拠とした句を実作例として掲げるが、心敬の句が引用されることも多い。しかも、『芝草句内岩橋』という、心敬の自注付きの自選句集より、自注部分も含めて引用し、故事解説に代えている。このように、『故事』には、確実な資料に基づいた引用がある一方、『大原三吟』や『基佐心敬問答』といった、著名連歌師に仮託された連歌論書を引用することもあった。のみならず、本来は心敬の弟子・兼載の句を心敬句として引用し、そこに「まぎれぬ心敬は仙人にてまします」という評語を付す。心敬は、1467年に関東で死去したが、死後百年の間に神格化されたことが推定できた。このように、『故事』には、和歌、連歌、故事の正確な引用と、逆に不正確な引用が混在するが、それらの混在のあり方、また混在している事実自体が、16世紀の地方における学習の姿であると考えられた。

(4) 抄物・訓点資料領域

蔦は、中世後期、五山僧や博士家の貴族によって作られた、漢籍・仏典の講義の記録、あるいは註釈書である「抄物」を考察対象とし、特に、蘇東坡と黄山谷の抄物の中に、従来知られていなかった、蘇軾・蘇轍の出生に関する故事が記されていることに注目した。そして、その故事についての知識は、抄物や講義を通じて五山僧や堂上の貴族たちの間に広まり、それは近世の文化圏にも継承されていったことを具体的に検証した。

さらに、故事書『蒙求』の和文化である『蒙求和歌』の翻訳方法と『蒙求』の抄物である『蒙求抄』の注釈内容を比較・検討した。翻訳作品たる『蒙求和歌』においては原典に対し作品独自の要素が附加されており、翻訳というよりは翻案に近い様相をも示している。これは、恋愛を語る物語作品としてその附加される内容が不可欠であったのだと解釈される。一方、注釈書である『蒙求抄』では、原典の用語・表現を分かりやすく解説するのみであって、独自の追加要素などは存在しないことが明らかとなった。注釈書として当然ではあるが、ここに、『蒙求和歌』との態度の明確な違いを見て取ることができる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

阿尾 あすか、研究ノート：伏見院の悲秋歌の解釈について、人間教育、査読無、2巻3号、2019、pp.94-100

森田 貴之、『二十四孝詩歌』について、南山大学日本文化学科論集、査読無、第19号、2019、pp1-24

竹島 一希、関東における心敬の位置 『故事本語本説連歌聞書』考(承前)、査読無、国語国文研究、第51号、2019、pp.1-16

小山 順子、西行和歌のことばと漢文訓読、国語と国文学、招待有、95巻11号、2018、pp19-31

〔学会発表〕(計3件)

TSUTA kiyoyuki, "Chinese Anecdotes in the Mōgyū-shō (the commentaries written in kana on Meng-qui(Beginner's Guide))", 5th Japanese studies conferences; JAPAN - PREMODERN, MODERN AND CONTEMPORARY, Bucharest, 2017/9/6[EN]

TSUTA kiyoyuki, "Chinese Anecdotes in the Shōmono (commentaries written in kana on Chinese classic books)", 15th EAJS International Conference 2017, Lisbon, 2017/9/1[EN]

蔦 清行、蒙求和歌の恋部について The Category of Love in "Mōgyū-waka", 第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、香港公開大学、2016/11/19-20

〔図書〕(計1件)

森田 貴之・蔦 清行・小山 順子、勉誠出版、日本人と中国故事 変奏する知の世界、2018、280 p.

本図書には研究代表者、研究分担者の以下の研究成果を含み、ほか13名の寄稿論文を含む。

阿尾 あすか、中世和歌における「子猷尋戴」故事の変容、pp.48-58

小山 順子、『伊勢物語』第六十九段「狩の使」と唐代伝奇、pp.59-68

森田 貴之、延慶本『平家物語』の李陵と蘇武、pp.99-115

竹島 一希、故事と連歌と講釈と—『故事本語本説連歌聞書』、pp.116-127

蔦 清行、中世後期の漢故事と抄物、pp.182-195

また、本図書には研究協力者の以下の研究成果を含む

濱中祐子、初期歌語注釈書における漢故事 『口伝和歌抄』を中心に、pp.33-47

中村真理、俳諧の「海棠」 故事の花と現実の花、pp.154-166

山中延之、桃源瑞山『史記抄』のことわざ「袴下辱」について、pp.196-200

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小山順子

ローマ字氏名：KOYAMA junko

所属研究機関名：京都女子大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20454796

研究分担者氏名：薦清行

ローマ字氏名：TSUTA kiyoyuki

所属研究機関名：大阪大学

部局名：日本語日本文化教育センター

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20452477

研究分担者氏名：阿尾あすか

ローマ字氏名：AO asuka

所属研究機関名：奈良学園大学

部局名：人間教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：30523360

研究分担者氏名：竹島一希

ローマ字氏名：TAKESHIMA kazuki

所属研究機関名：熊本大学

部局名：大学院人文社会科学研究部(文)

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10733991

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。